退職後の日々

佐藤守正

六月も末になると、さすがに最後に担任した子どもたちからの、四年生になっての新しい担任との間のあれこれを報告する電話はなくなった。家にパソコンを持っている子達からのメールもぱったりと途絶えた。「先生、近く遊びに寄せてもらいますよ。」と言う親達からの声もかからなくなった。学校から離れがたい私は、四月五月と厚かましくも授業参観になど親に混じって出かけてみたもののいつまでも子どもたちの目を私の方に向けておこうとする卑しい根性に気づいて、以後は遠慮してしまった。明日までにこんな準備をしておこう、この作文帳に赤ペンを入れなくては、などと迫われていた日々から解放されて虚脱しながら、こんなにのんびりした生き方も捨てたものじゃないと、ようやく思い始めている。

在職中も明るいうちに学校を出れる日は家に帰らず、帰路とは反対の方向にある畑に通って、暗くて手元が見えなくなるまで野菜を作る楽しみに身を浸していたのだが、今は心置きなくいつまでも畑に居れるようになったことも、退職とはいいものだと思わせられる一つの要件である。百坪程の畑に、なす・トマト・カボチャ・サツマ芋・大根などの定番以外に、モロヘイヤ・ズッキーニ・プッチーニ・パプリカなんぞの新種の野菜にも手を出して、近隣の畑作りの仲間に「なんだい、この珍しいものは?」と問い掛けてもらうことも楽しみである。

参議院選挙が終わった直後の、となり組の葬儀の席で介護保険が話題になった時、それに対する期待より不安を持つ人の方が多いことに気づいた。ずっと居住地とは異なる町に

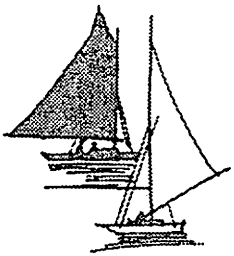
にいがた

北から南から

勤務していて自分の地域にはなじむことなく暮らしてきたが、地域のお役に立つ機会になるかもしれないと思って、「介護保険」の学習会をやろうと呼びかけたら、五十歳台の母ちゃん達を中心に二十余名の人たちに集まっていただけた。介護が自分自身の切実な問題にならざるを得ないこの年代の母ちゃん達の関心は強く、これで介護地獄からは開放されるとという宣伝はまゆつばだと鋭く見抜いている人も何人かいる。この母ちゃん達と一緒に勉強することが、当面の私の働き場所だと思い始めている。

倉敷市での自治体学校「介護保険」分科会で、「介護問題についての専門知識を全く持たない私たちでも、介護保険事業計画策定委員会に入っていって役にたつのだろうか」と発言したら、たくさんの参加者から、「素人の感覚こそ大切。肩書きで選ばれた委員だけじゃなく、地域の要求を代弁できる素人こそ必要だ」「地域住民が行政に要求していく格好の学習の場。たくさんの素人を送り込んでほしい」とはげまされた。

帰ってすぐ、計画策定委員会のメンバーを公選して欲しいなどの要求をかかげて、町長交渉をしようと取り組んでいる。次の学習会のテーマは「介護の苦労と不安を語る会」。婦人会の役員がこの集会への参加を確認するために、会員の所を個別に訪問しているというニュースも入ってきた。今後は参加者の数が大幅に増えそうで、その分責任も重くなる。

朝七時過ぎになるとなにやら落ち着かなくなったり、畑に通うために勤務校の裏手の国道を車で通るたびに、学校に向けて無意識のうちにハンドルを切りそうになるといった退職後症候群からようやく抜け出し、次の課題を見つけて動き始めている今日この頃である。

（さとうもりまさ・南魚沼郡湯沢町）